第１学年２組　実践道徳活動案

柵について

活動場所：１年２組教室
１０月２８日（水）９：２０～１０：２０
提案者　　風間　寛之

活動設定の意図

つながりについて（自主，自律，自由と責任、友情，信頼）

子どもは創造活動「もこもこえん」で、４頭のヒツジとの生活をつくりながら、自分とヒツジ、仲間、学級集団などとのつながりをつくる。そして、ヒツジとの出あいから別れに至るまでの過程全てにおいて、これらのつながりについて見つめ続ける。

私たちは、様々なつながりをもちながら社会の中で生きている。人と人が、人とものやことがつながり続けるには、変化することが必要であると考える。それは、つながる相手が変化すること、また自分自身が変化することは避けられないからである。子どもがつながりをつくってきたヒツジも変化し続けている。身体が大きくなり、より高くジャンプしたり、より速く走ったりできるようになったことが顕著な変化であると言える。そんなヒツジが、柵を飛び越えたり、押し破ったりする姿から、子どもはヒツジが外に出たい気持ちをもっていることを捉えている。「ヒツジの自由にさせてあげたい」と考える子どもがいる一方で、「柵の外に出て、怪我をしたり食べてはいけないものを食べたりするかもしれないから柵からは出せない」と考える子どもがいるだろう。

これまでヒツジと共に生活をしてきたことから、自分とヒツジとを重ね合わせて考えることを通して、自分とヒツジとがつながりをつくり、つくり変え、つながり続けることについて思考するのである。

１　道徳的な価値観をつくる子ども

１年２組では創造活動「もこもこえん」において、４頭のヒツジと共にある生活をつくる中で、ヒツジや場にはたらきかけ、自分とヒツジとのかかわりを変化させている。

子どもは、４頭のヒツジと生活を共にする中で、ヒツジと一緒に過ごすことのできる場をつくり続けてきた。前庭や原っぱに柵を立て、雨宿りができる小屋や、ツリーハウスを建設した。さらに、前庭と原っぱとを行き来できるような道をつくり、ヒツジが自由に行動することができるような場を広げている。しかし、柵で囲う場をどれだけ広げても、ヒツジが柵を飛び越えたり、隙間をすり抜けたりして、柵の外に出てしまうことがある。そのようなヒツジの姿をとらえた子どもは、「ヒツジさんは柵の中にいたくないのかな」と話すことがあった。さらに、学校に来てから５ケ月が経とうしているヒツジの身体にも、変化が表れてきている。目に見えて大きくなったヒツジは、これまで超えることができなかった柵を飛び越えたり、大人でも追いつけないような速さで走ったりするようになっている。

このような事実をとらえた子どもと、ヒツジと柵の関係について考える。ヒツジにとって柵が必要なものであると考える子どもは、ヒツジの行動を制限することでヒツジの安全を確保することができたり、自分自身が自由に行動したりすることができると考えるだろう。ヒツジにとって柵は必要ないと考える子どもは、ヒツジが外に出ることによって自由に行動できる範囲が広がるよさや、原っぱに慣れてきたヒツジは他の学級に迷惑を掛けることが無くなってきていることを主張するだろう。また、これらの議論を通して、ヒツジに優しくすることやヒツジと仲良くすることにも目を向け、思考を深める子どもがいると考える。

このように、ヒツジと柵の関係を見つめ直すことを通して、自分とヒツジのつながりがどのように変化してきたのか、また今後どのようにつくり変えられていくのかについて考えるのである。

２　本時の構想・展開

（１）本時のねらい

ヒツジと柵の関係について考えることを通して、自分やヒツジにとっての自由や制限について見つめながら、他者とよりよくかかわることについての自らの価値観をつくる。

（２）　道徳的な価値観の自覚を促す手立て

○　ヒツジの気持ちを想像する

子どもは柵を飛び越えたりすり抜けたりするヒツジとの生活をつくりながら、「ヒツジさんは柵の外に出た

いのだろう」という考えをもっている。そこで、前庭の小屋の扉に頭をぶつけ、扉を破ろうとするヒツジの動画を見る。そして、ヒツジが外に出たがっていることを共有しながら、「なぜ外に出たいのか」ということを考える。ヒツジが柵の外に出たいと思う理由を想像することで、ヒツジと自分とを重ね合わせて考えるのである。

（３）対象の新たな一面にふれる手立て

○　「柵をなくしてもいいですか」と問う

ヒツジが柵の外に出たいと願う気持ちの背景を想像した子どもは、「外に出して自由にしてあげたい」と考えるだろう。このような子どもの考えをとらえて「柵をなくしてもいいですか」と問う。

ヒツジの気持ちを尊重し、ヒツジの思う通りにさせることに価値を感じている子どもは、「ヒツジさんが外に出たいのなら、なくしてもいい」と話すだろう。ヒツジの成長に目を向けている子どもは「ヒツジさんが他の学級に迷惑を掛けることはないから、なくしても大丈夫だと思う」と話すだろう。また、自分とヒツジとを重ねながら、それぞれが成長することに思いを巡らせる子どもは「人間なら、成長したら柵が無くなる」または、「人間とヒツジとは違うから、ヒツジには柵が必要だ」と話すだろう。一方で、ヒツジが安全に過ごすことに価値を感じている子どもは「ヒツジさんの健康のためにも、柵があった方がいい」と話すだろう。また、自分自身の自由について考える子どもは「ヒツジさんが柵の中にいてくれるから、自分たちが『もこもこえん』以外の活動もすることができる」と話すだろう。さらに、これらの議論を通して、「ヒツジさんと仲良くすること」について思考をひろげる子どもがいると考える。制限や自由といった立場を踏まえて思い悩む姿があると考える。

このように、「ヒツジさんの柵がいるのか・いらないのか」と、なぜそう思うのかについての自分や仲間の考えにふれることを通して、よりよくかかわることについての自らの価値観をつくり出していくのである。

（４）本時の展開（６０分）

時間	番号；子どもの活動　　・；子どもの姿	○；教師の手立て
１０	１　外に出ようとするヒツジの気持ちを想像する ・たくさん草を食べたいのだろうと話す。 ・広いところで走り回りたいのだろうと話す。 ・周りが囲まれているのが嫌なのだろうと話す。	○ヒツジが小屋の扉を破ろうとしている動画を用意し、その時のヒツジの気持ちを想像しながら話をできるようにする。
３５	２　ヒツジの柵をなくすことについて考える。 ・ヒツジさんが思うようにしてあげたいと考える。 ・成長したヒツジさんなら大丈夫だと考える。 ・柵の中にいてくれるから自分は色々な活動ができると話す。 ・自分とヒツジとを重ねて考える。 ・ヒツジさんと仲良くできるのはどちらか悩む。 ・仲良くすることについてのとらえをつくり変える。	○「ひつじさんのさくをなくしてもいいですか」と問う。 ○ヒツジの成長が分かる写真を用意する。 ○人間と柵の関係が分かる写真を用意する。 ○柵の外に出たヒツジが体調を崩した時の写真を用意する。
１５	３　活動を振り返って作文シートを書く ・ヒツジさんの気持ちを大切にしたいと考える。 ・ヒツジさんが安全に過ごせるように守らなければいけないと考える。 ・ヒツジさんと仲良くするには、ヒツジさんが変化していることをとらえる必要があると考える。	○「今日の道徳で考えたこと」を作文シートに書く。 ○制限と自由について悩む子どもや、ヒツジとのよりよいかかわりについて思考する子どもを意図的に指名し、考えを共有する。

３　活動の振り返り

（１）柵を見つめる子どもがつくる道徳的な価値観

実践道徳「柵について」の活動公開の前週、２３日の金曜日、飼育小屋にいたヒツジが誤って、小屋に置いてあった配合飼料を大量に食べてしまい、翌日から体調を崩し、子どもが登校する月曜日にも全快とはならなかったという出来事があった。月曜日、子どもはヒツジの排泄物の具合から、いつも通りではないということを感じると共に、担任からこの事実を聞かされた。

【図１　ヒツジの汚れをきれいにする子ども】

子どもは、このような事実と出あい、ヒツジの消化によい食べ物をあげたり、汚れたお尻を拭いたりして（図１）、ヒツジの回復を願いながら活動をしてきた。２８日の実践道徳においても、この事実を想起したことによって、柵の意味についての議論は大きく動いたと感じた。「もこもこえんの柵をなくす」ことに対しての、仲間の「柵から出たらまた配合飼料を食べに行ってしまうから、柵はなければいけない」という考えを聞いた康さんは、「今日の朝も配合飼料の方に向かっていったのを僕が抑えたんだ」と話した。自らの体験を基に、ヒツジの現実を語っていた。多くの子どもは、柵は、ヒツジの身体を守るものととらえ、その必要性をそれぞれの言葉で語っていた。

信也さんは、これらの意見に対して異論を唱えた。「ヒツジさんは、柵を出たっていつも草を食べてるから、大丈夫だよ！」と話し、「だって人に柵なんてないじゃん」と付け足した。ヒツジが柵を超える度に、走って駆け付け、柵に戻すことを繰り返してきた芦太さんも、自身の体験から、柵を出たヒツジがどのように過ごしているのかを語った。６月、脱走して他学級の庭園などに踏み入って荒らしてしまっていたヒツジの姿との変化について語り、その成長を感じていた姿であると言えよう。実際にも、毎日夕方には、ヒツジを柵から出して、飼育小屋に戻しているが、その際にはリードを付けずに、ヒツジが自分から戻っていくのを見守る子どもの姿が見られる。（図２）そして、人（自分）とヒツジとを重ね合わせながら、柵による制限が、ヒツジにとっても窮屈なものになるのではないかと考えたのである。人が成長するに伴って、柵などの物理的な制限から解放されることと、６月に出あったヒツジが学校の原っぱや自分たちに慣れ、変化してきたことで、柵という制限から解放したいと願う姿であったと考える。

【図2　リードを付けずに飼育小屋に戻るヒツジを見守る子ども】

陽介さんは、「柵がないと、杭とかで繋いでおかないといけない。だから柵があった方が自由だ！」と話した。陽介さんは、ヒツジが来た当初、リードを持ち、何度もヒツジに引っ張られた。転んで泥だらけになることもあった。共に生活をしてきた中で、陽介さんはヒツジのリードを持って一緒に歩いたり、リードを外して飼育小屋まで競走したりするようになった。そんな中で、陽介さんは杭に繋がれる様子や小屋の中で過ごす様子、柵の中を走り回る様子、柵の外に飛び出す様子を何度も目の当たりにしてきた。ヒツジに重ね合わせた自分が、「自由」になれるのはどんな時なのかを考え抜いた結論だったのであろう。「もこもこえん」の柵にはどんな意味や価値が在るのか、自身の体験を基にしながら、このとらえをひろげ、確かにしていった姿であると考える。

雅人さんは、ヒツジにとっての柵の存在について考えていたが、「柵がなくなると、不安になるからなくしてはいけない」と話した。柵とは、ヒツジにとって必要な物であり、ヒツジのためにつくっていた物であったのだが、雅人さんの話したことからは、「自分にとっての柵の存在とは」について考えていたことがうかがえる。これまでずっと、「もこもこえん」に当たり前のようにあった柵。材木を運ぶために、「りやかあ」を使って何度も何度も原っぱを行ったり来たりしてつくった柵。毎朝、ヒツジを連れてきて、仲間とヒツジと鬼ごっこをした柵。その柵がなくなってしまうことで、自分がつくってきたもの、過ごしてきた時間が変わってしまうのではないか、自分のための存在としての柵の価値を見つめ直した姿であったと考える。

（２）道徳的な価値観をつくる子どもの姿を思い描く

実践道徳「柵について」を構想するにあたって、「表出」「自問」「創出」「伸張」という、道徳的な価値観をつくる子どもの姿を思い描いた。

恵子さんを始め、多くの子どもが「柵はなくしてはいけない」と考え、その理由についても話をした。「柵の外で、また配合飼料をたくさん食べてしまうかもしれない」「学校の外に出たら、車にひかれてしまうかもしれない」と、柵がなくてはならない理由として、ヒツジの身体の安全を第一に考えていることが分かる。反対に、「柵をなくしてもよい」と考えていた信さんは、「ヒツジさんは柵を出ても、その辺りの草を食べているから大丈夫」と話した。ヒツジが様々な面において成長していることをとらえていて、これに価値を感じていることが分かる。このように、柵をなくす・なくさないの背後に在る、自らの道徳的な価値観を「表出」しながらつくっていた姿であると考える。

１で述べた信也さんや雅人さんの姿は、ヒツジの為に、そして自分の為にという２つの視点で思考を深めている姿であると言える。ヒツジのことを考えていたつもりが、自分（人）について考えるようになったり、ヒツジのためだと思っていた柵を自分の為のものでもあると考えるようになったりしていることから、２つの立場を行き来しながら思考していることが分かる。その上で、自らの柵についての考えを話す姿は、道徳的な価値観を「自問」しながらつくる姿と言えるのではないだろうか。

さらに陽介さんは、柵をなくす・なくさないの議論から、そもそも柵とは何のために在るのかということに思考を深めた。ヒツジの自由の為であるとしたら、ヒツジや人が「自由であること」とはどういうことなのかを考えていた。柵の存在の意味を問い、自らの自由についての考え方をつくり変える姿は、道徳的な価値観を「創出」しながらつくる姿と言えるのではないだろうか。

私は、道徳的な価値観をつくるこれらの様相は、活動を構想・展開する際の視点の一つであると考える。これらの姿が見られたからどうかということではなく、これを視点として活動を構想し、子どもの姿を見つめることが、どのような道徳的な価値観を、どのようにつくっているのかをとらえることにつながると考える。子どものつくる道徳的な価値観をとらえるには、本時における子どもの姿を見ているだけでは不十分である。創造活動を中核とした子どもの学校生活を丸ごととらえ、長いスパンで変化や変容をとらえ続ける必要がある。実践道徳を構想・展開するためには、子どもと共に生活する中で、子どもをとらえ続けることが、必要不可欠であると考える。

【図３　実践道徳「柵について」の板書】

＜メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください＞

提案者連絡先　hkazama@juen.ac.jp（風間寛之）